

東アジアの端午—「薬物」を中心に

周星（愛知大学教授）

要旨

中国の端午節、韓国の端午祭、日本の端午の節句を一国民俗学の立場からすると、それぞれの国の年中行事に組み込まれて語られることや、それぞれの端午の特徴が強調されることは、当たり前であるが、「端午」をめぐる一部の民俗事象が無視されるか過小評価されて、見失われることもあり得る。比較民俗学の立場からすれば、「東アジア」という枠組みの中で「端午」を取り上げ、その根底に共通・共有される端午の文化を再認識することができる。それは「薬物」である。本発表は有形・無形あるいは物質文化・非物質文化の二分法を乗り越えて、端午祭における「薬物」を考察し、東アジアに共通する独特な宇宙論に基づく端午の薬物の原理を明らかにしたいと思う。

はじめに

2005年11月、韓国「江陵端午祭」がユネスコによる「人類の口承及び無形文化遺産の傑作」への認定を宣言された。中国のマスコミをはじめとする諸団体やインターネットへの書き込みは猛反発で、中国政府の文化政策にも批判しながら、「文化を盗んだ」と「嫌韓感情」が一時的に強まった。文化ナショナリズムの種となったのである。

2006年、中国政府は「端午節」を「国家非物質文化遺産代表作リスト」へ公式に登録した。

2008年、端午節は法定休日改革により国民の休日として指定された。

2009年9月、端午節は韓国と同じように「人類の口承及び無形文化遺産の傑作」への認定をも実現した。

中韓の民俗学者は「一国民俗学」の枠組みに制限されて、両国民衆の対立した文化ナショナリズムに対し、無力感を切に実感されている。

東アジアの端午を捉える二つの視点

「一国民俗学」の視点：端午節（中国）、端午祭（韓国）、端午の節句（日本）はそれぞれの国民国家の中で「年中行事」の一環として位置づけされてきた。その「年中行事」はそれぞれの国の国民文化の軸と言っても過言ではない。民俗学は国民国家の「学問」であり、それぞれの国の文化ナショナリズムを支えているというのが現実である。

中国民俗学：有る地方の端午がしばしば全国的現象（「中華」）として語られる。概説的で、具体的な地域やコミュニティの調査が欠如している。愛国主義のイデオロギーの影響

により、屈原との関連性が強く強調されているし、華やかなドラゴン・ボートレースが強調されている。特に政府が主催しているイベントが大いに取り上げられて、庶民の「草根」レベルの事象、例えば、南中国の各地域で普遍的に存在している「端午薬市」は、殆ど取り上げられることがない。また、隣国との比較研究は殆ど行われていない。

韓国民俗学：中国端午との区別が目立つ事象はよく強調され、「名前だけ同じ」と言われる江陵端午祭のように、より韓国的要素がメインの語りである。かつて中国端午との繋がりのある事象は軽くみる傾向があるか。韓中端午の比較研究は殆ど行われていない。

日本民俗学：端午の中国起源を認めるが、「子供の日」をメインに日本独自の要素や事象が展開され描かれる。日中端午の比較研究はある程度の蓄積があった。

「比較民俗学」の視点：「東アジアの端午」と言う枠組みの可能性がある。越境する「端午」・共有する「端午」と言う発想から、東アジアの「端午文化圏」・「民俗文化圏」が少し見えてくるかと思われる。「一国民俗学」の端午研究に重要視されていなかった事象が、「比較民俗学」の視点からは、「再発見」もできるかもしれない。「一国民俗学」において、各国端午の特徴が「比較」の観点からは、見失う恐れがなくて、むしろより鮮明に浮き彫りになる可能性があると思う。

越境・共有する「端午」の宇宙論

かつての旧暦を共有していた東アジアでは、千年以上にわたって、時間制度、天候観念、季節感をも共有していた。端午に関して、「毒月」・「悪月」・陰と陽が相克する月や天候の変わり目の解釈は、ほぼ一緒であった。一年の折返しが意識され、五月の端午・夏至前後に、「日の長きこと至(きわ)まり、陰陽争い、死生分かる」と理解されている。広範囲において、変則的な言い伝えがあっても、熱い夏が来るに伴って、「邪気」・「毒気」・「病気」の氾濫に対峙できるか邪気払いのできる「正気」・「陽気」・「薬気」を生み出すのは、すべての端午儀礼や民俗活動の目的である。汚染される危険性のある日常を様々な「浄化儀式」で対応するのが端午である。端午の日に取った薬草、または、作られた「薬」が一番効くという俗信は日中韓で共有されている。この日は薬用植物を摘むのに好適と言われる。端午の「薬物」は「鎮物」でもある。天気、人気、病気など「気」の理念をも共有している。

端午に登場する「薬物」の多様性

中国：端午は、薬草を採る日、薬を作る日として位置づけられる。この日採った薬草を一年分蓄積する。この日に採った薬草は、もっとも効くといわれている。野生の薬草だけではなく、薬草の栽培農家にも「端午節前は草だが、端午節になると薬になる」という言い方がある。蓬・菖蒲をメインに各地域で桃・榕枝・大蒜など、多くの種類の薬草はすべて薫りか匂いがする。それは薬草の「気」である。ヨモギは古くから体内の毒気を取り去ると

いわれる薬草であり、菖蒲は不祥を払うものと見られていたので、その強い香気と薬性により、災厄を除き、病魔をさけるパワーを備えている。「薬物」でありながら「鎮物」でもあるのだ。

邪気を除く為、門や窓の前に蓬・菖蒲・ザクロの花、ニンニクなど薬草の束を魔よけとして飾ったり、部屋につるしたりする。髪飾り・首飾りにもする場合もある。蓬で「艾人」、「艾虎」を作る。菖蒲は「蒲剣」とも呼ばれ、「百陰の氣」を斬ることができる。「五毒」の一つである蟾蜍（せんじょ・ひきがえる）より薬を取る。「毒」を持って「毒」を制す民俗知識である。

薬酒：「菖蒲酒」・「雄黄酒」。

香包・匂い袋：5色の糸で絹布を裁縫し、香料や朱砂・雄黄、白檀などの生薬を入れたもの。それを身に着け、無病息災を祈願し、身の穢れ（けがれ）をも祓おうとする。

薬草を入れて湯浴みする。

いちばん神効の強い時間は正午（12時ごろ）であり、水を汲んで顔を洗ったり沐浴したりする。台湾の民間では「午の刻に水を採れば、薬を三年飲んだのと同じ」という諺がある。多くの地域では、端午に雨水を集める風習があり、この日降った雨水は神水で、災いを除き、病を治すといわれている。

浙江省蘭溪一带では、「熏薬渣」の習慣がある。端午の正午に、各家庭が艾葉（よもぎ）と乾燥させた薬渣（薬を煎じた後のかす）をいぶす。殺菌・疫病を駆除する効果があるといわれる。

端午の日の薬草市場：薬草の「気」やにおいを嗅ぐために人々が集まる。端午節を「全国衛生防疫節」として国民教育に役立たせるべきだと主張している学者もいる。

端午薬膳。端午茶。

日本：端午の節句は「薬の日」（くすりび）。宮中や民間では薬と関係のある行事が盛んに行われる。ヨモギを主役とする中国（イメージ）に対して、日本の端午において菖蒲を邪気祓いの主役としているので、菖蒲の節句とも呼ぶ。菖蒲は薬用と厄払いの力の両方があるといわれる。

飛鳥時代：（611年）「薬狩り」（くすりがり）。

奈良—平安時代：五つの節句（人日・上巳・端午・七夕・重陽）が受容され、それぞれ季節の節目に身のけがれを祓う行事として定着していた。

菖蒲鬘。

薬玉（くすだま）：かつての貴族社会では薬玉を作りお互いに贈りあう習慣もあった。

軒菖蒲（のきしょうぶ）。菖蒲茸き。

菖蒲酒。菖蒲枕。菖蒲湯。

江戸時代：菖蒲胃（しょうぶかぶと）。菖蒲鉢巻き。

菖蒲合（あわせ）。菖蒲打。鍾馗の像。

菖蒲＝尚武＝勝負　鯉幟　子供の日

朝鮮半島：端午は一年で一番、陽気旺盛な日といわれる。陰陽五行思想によると最も「陽」に満ちた日とされ、端午の日を境に本格的な夏が始まる。村ごとに鬼の退治と豊作を地神、山神に祈る祭祀を行い、各家庭では体と家の周りを清める。

魔除けのお札を玄関先に貼ると、家の中のあらゆる厄を払えとされている。

災厄を追い払うため、午の刻（午前11時～午後1時）に「薬」として使うヨモギを大門の横に立てる場合もある。

菖蒲水の洗髪：女性と子供は菖蒲を入れて煎じたお湯で頭（髪）を洗う。

「端午粧（タノジャン）」：菖蒲の根を削って赤い水で染めてかんざしを作って頭に飾る。頭痛と災厄を防げる。

端午の明け方、サンチュ（韓国産レタス）畑に行ってサンチュの葉っぱについた露を集めて粉を混ぜて顔に塗ると綺麗な肌になるともいわれる。

前日の夕方から水を溜めておき、端午の日の午の刻に無病息災を祈りながら溜めておいた水を使ってお風呂に入る。

醍醐湯：かつて端午に宮中で王に献上されていた醍醐湯(チェホタン)は烏梅(ウバイ)、白檀(ビャクダン)をはじめとする各種の韓薬剤を煮つめた飲み物。苦味がきいた爽やかな味で、消化によく夏バテを防止する効果がある。

「玉枢丹」：かつて王より、大臣に賜る「端午薬」であった。

車輪の型押しをした餅「車輪餅(スリトッ)」(ヤマボクチの葉を混ぜて作った蒸しもち)。厄を退くといわれるヨモギや、旬の山菜・ヤマボクチ(スリチッ)などが使われる。

あずきとヨモギを使ったヨモギ餅を食べる。

まとめ

日韓の端午の特徴、中国端午と異なるポイントは数多くあることを十分承知したうえで、「薬物」を中心に東アジアの端午を見てきたが、中国各地域だけではなく、日中韓の端午における「薬物」とそれに関連する民俗事象は千差万別である。しかし、その根底に潜んでいるものが、やはり実在的に重要である。かつての東アジアは一つの文明圏であった。儒教、漢字、律令制度などハイカルチャーだけではなく、民俗、器物、暦や曆に関係していた宇宙論も共有していた。それぞれ国民国家の成立により、その文明圏が崩壊したが、その名残としての遺産は様々な形で温存されている。これらの文化遺産を大切に、受け継ごうとする動きは、各国の国内では勿論であるが、国際的にも連動している。ユネスコによる「世界非物質文化遺産」の申請登録というメカニズムは、あくまでも国民国家の文化財行政に基づいたものであり、全人類皆の「文化遺産」を理念としているが、国民国家の文化ナショナリズムの演出になってしまうのがしばしばである。それに、「無形」・「有形」あるいは「非物質」・「物質」の二分法で東アジアの端午における「薬物」およびその「気」などを説明・解釈することは、とても無理であり、対応しきれないのである。

民俗学者はその二分法から脱出する必要があるかもしれない。日中韓の民俗学者は、互いに隣国の民俗文化を尊重し、趣味を持つべきであり、「比較研究」を通して、「東アジア民俗学」の可能性を探っていくべきである。